

An aerial photograph of a rural landscape. The foreground is dominated by a dense, green forest. Beyond the forest, there are several large, rectangular greenhouses with white covers. The middle ground shows a patchwork of brown and green agricultural fields, some with distinct patterns. In the background, a small village with several buildings is visible, surrounded by more fields and forested hills. The overall scene is a typical rural landscape in a mountainous region.

# 鞠智城跡

発掘調査概報

熊本県教育委員会



## 序



県内で、唯一の古代山城として知られる「鞠智城跡」<sup>くくちじょう</sup>は、古代へのロマンを感じさせる魅惑の文化遺産ではありますが、多くの識者からの見解からも分かりますように、謎の多い城跡であります。

本県の代表的考古学者であった故坂本経亮氏らの長期間にわたる地元に着した研究に加え、県教育委員会の調査も進行し、現地が城跡であることが立証されました。

平成2年度からは県を代表する遺跡として整備することを目標に、従来の国庫補助による調査に加えて、県の自主事業による主要遺跡確認調査を実施致します。

これまでも菊鹿町教育委員会や、本田啓介氏をはじめ地元の方々の御協力を受けてまいりましたが、さらに、この調査が円滑に遂行され、その成果が地域の活性化につながりますよう、地域住民の御理解と御支援をお願い致しますとともに、この概報が県民の皆様の鞠智城跡に対する御理解を深めていただくことになれば幸いです。

熊本県教育長 松村 敏人

## I. 鞠智城の歴史

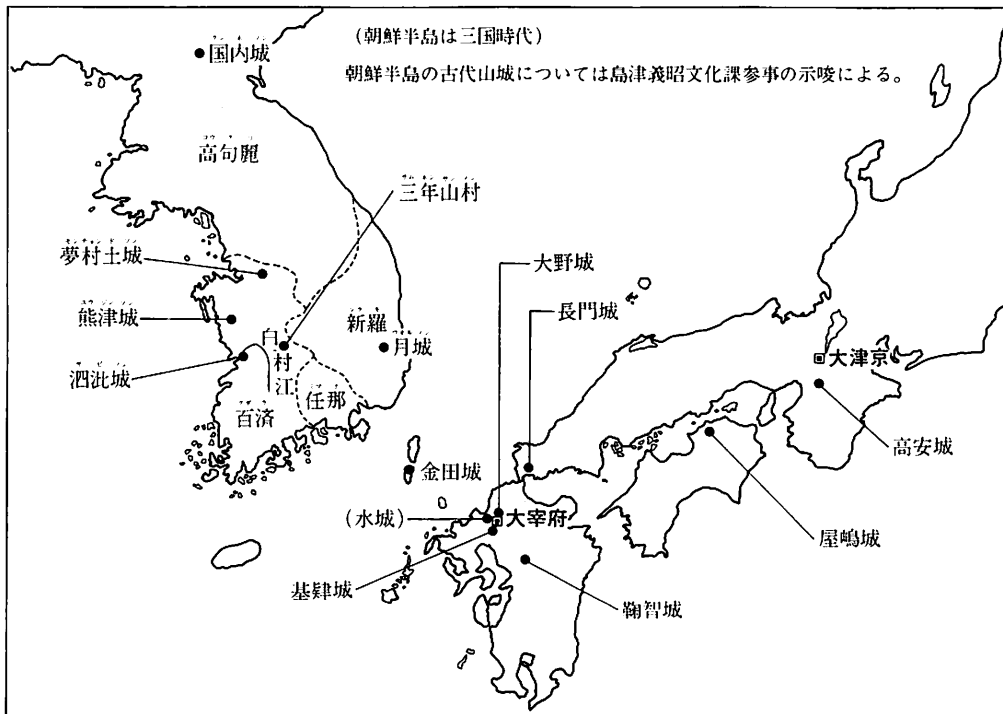
〔1〕 鞠智城は7世紀代の律令国家によって築城された古代の山城で、大宰府<sup>だざいふ</sup>（大和朝廷の九州統括と対外交渉の基地）の管轄下にあった6城（大野城<sup>おおの</sup>・基肆城<sup>きしい</sup>・金田城<sup>かなた</sup>・鞠智城<sup>くくち</sup>・三野城<sup>みの</sup>・稲積城<sup>いなづみ</sup>）のうちの一城である。

城の呼称に古くは「鞠智」の文字が見え、後に「菊池」が用いられている。平安初期に編纂された『倭名類聚鈔』<sup>わみょうるいじゅしょう</sup>の「菊池」には「久久知」の読みが付けられ、何れも「ククチ」と発音されたい。現在の「キクチ」に変化した時期は不明である。

『日本書紀』<sup>にほんしょき</sup>によると7世紀中頃の日本は多事多難な時代であった。大化改新（645年）後の国内整備もままならない状態の時に、朝鮮半島において重大な事態が発生し

たのである。日本と同盟関係にあった百済の救援のために出兵していた日本の水軍が、新羅・唐の水軍と白村江（韓国忠清道錦江）で激戦し（663年）、敗北の事態に至った。これにより百済は滅亡し、結果として日本は新羅（唐）の急襲を想定しなければならなくなった。そこで国防のため、主に西日本地方を中心に次々と防塞施設が設けられたのである。

『日本書紀』『続日本紀』の正史によれば、まず、対馬・壱岐・筑紫国に防（人）と烽を置いて対大陸の見張りとし、大宰府の側面には水城（大堤）が築かれた（664年）。さらに、大宰府北側の大野山と南側の基山に大野城と基肆城が築造された（665年）。続いて、対馬に金田城が築造され（666年）、大和に高安城、讃吉国に屋嶋城が築かれ



古代山城の分布図（7世紀）

注1. 一般に朝鮮式山城と呼ばれ、7世紀の後半までに『日本書紀』『続日本紀』に城名が登場する他の古代山城に、長門城・屋嶋城・高安城などがある。

注2. 防衛体制は対馬・壱岐・筑紫から着手し、順次、瀬戸内・近畿に及んでいった事が判る。烽火の設置や水城・山城の築造・修理が699年まで連続して行われている。しかし、8世紀に入ると、山城・烽火の廃止が始まっている。これは唐の撤退後、676年に新羅が朝鮮半島を統一し、8世紀には半島情勢が安定化に向かった事と関係があろう。

ている (667年)。また、『続日本紀』には鞠智城の繕治 (698年) と三野・稻積城の修理を伝える記事がある (699年)。  
(注2)

## 〔 2 〕 文献に見える鞠智城関連の記事

(注) 書き下し文

「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕ひ治めしむ」

『続日本紀』 文武天皇 2 年 5 月 25 日条 (698年)

「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」「丁巳、又鳴る」

もんとくじつろく  
『文徳実録』 天安 2 年 2 月 24・25 日条 (858年)

「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」「菊池城の不動倉十一宇火く」

『文徳実録』 天安 2 年 6 月 20 日条 (858年)

「カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草をかみ抜く」

さんだいじつろく  
『三代実録』 貞観 17 年 6 月 (875年)

「肥後国菊池城院の兵庫の戸自ら鳴る」

『三代実録』 元慶 3 年 3 月 16 日条 (879年)

すなわち、文献史料から裏付けられる鞠智城の存続年代は 7 世紀末から 9 世紀後半という事になるが、築城と廃絶の時期については、何も記録が残っていない。

その後、長い時間の経過のなかで鞠智城は人々の記憶から消え、よなぼるちやうじやんせつ米原長者伝説とし  
(注3)

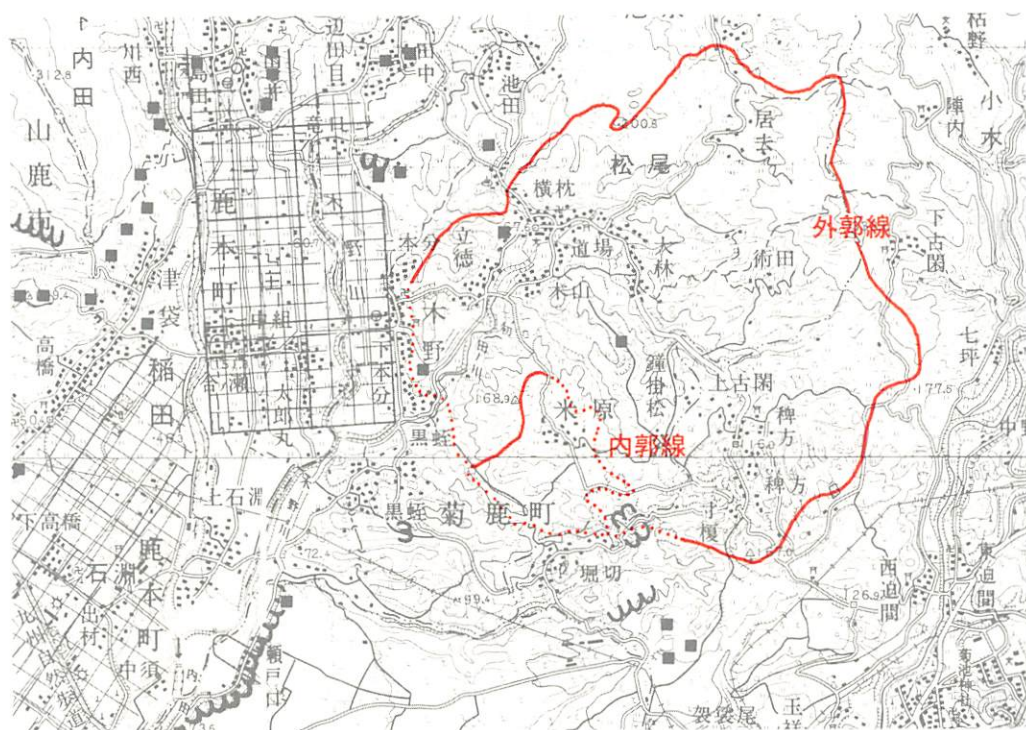
のみ生きてきたのである。

注 3. 大分県大野郡三重町内山観音にまつわる炭焼小五郎 (柳田国男『日本昔話集』上) の長者伝説とほぼ同じであるが、後に財力と権力に溺れ、黄金の扇子で太陽を招き返した罪で、家屋敷・米倉・金倉がすべて焼け、滅んだという話しになっている。

## II. 城跡の位置と範囲

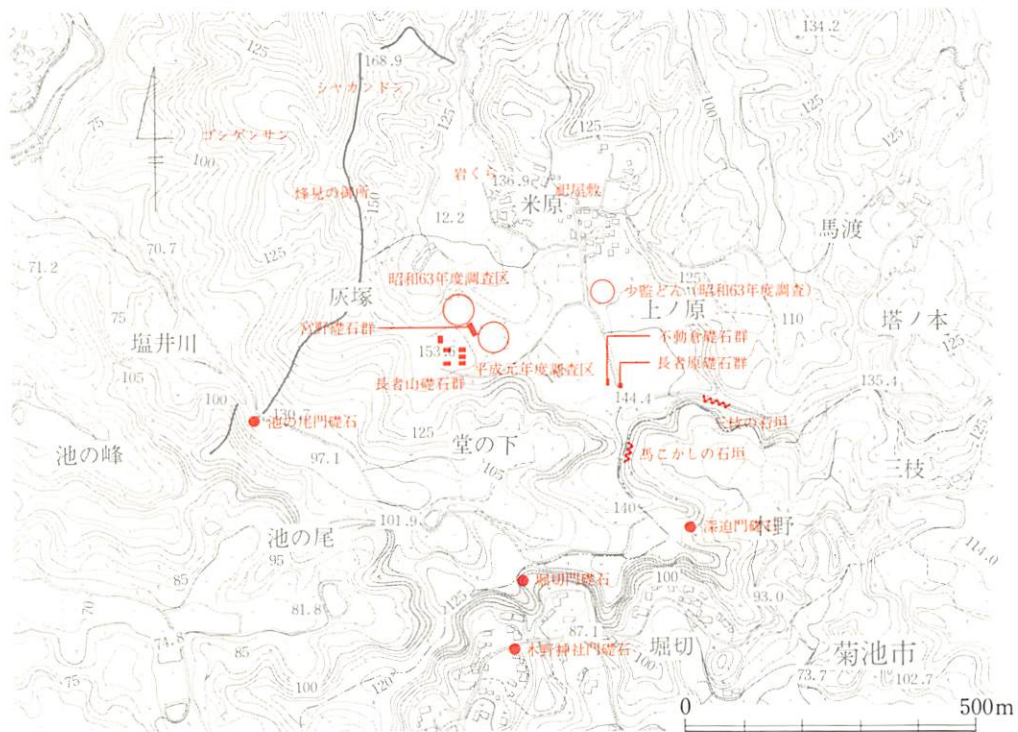
鞠智城の中心地は、米原長者伝説の地で知られる米原台地上 (南側、菊池平野との比高差は約 100m) に位置する。国土地理院発行の 2 万 5000 分の 1 地形図「菊池」によると長者山の位置は、図幅北から 0.5cm、西から 14.1cm の所にある。

菊池川の支流であるはざま迫間川ときのの木野川とに挟まれたうてな台地の基部にあたるこの一帯は、



鞠智城跡周辺地形図 (1 : 50,000)

■は古墳、mは横穴、≡は条理を示す。  
外・内郭線の実線は稜線、破線は岸線を示す。



鞠智城跡の内郭推定城域図  
(馬蹄形の配置を示す)

参考文献：『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告第59集 1983年  
『北上原古墳・瀬戸口横穴群』熊本県文化財調査報告第104集 1989年

標高100mから最高168mに達する台地であるが、周辺の地形が標高70～80mに及ぶので、丘陵下にあたる南側を除けば全体的に広い高台という感じになる。

城の内郭は谷に囲まれた米原台地が考えられる。現在も、米原には佐官どん・涼御所・長者山・長者原・矢倉・岩くら・紀屋敷・少監どん等の曰くありげな地名が数多く残っている。

内郭線の径は東西・南北とも約1.1kmである（狭域説）。そして、これらを取巻くように西は頭合・黒蛭を入口とし、これより北から東へは「キンガシラ」の連峰を経て、南は堀切の断崖線へ続く大きな馬蹄形をした自然地形があり、これを外郭線（広域説）と見なす向きがある。しかし、これについては最大直径3.6kmに及び、余りにも広大なものとなるので天然の要害をそのまま利用したと見るのが一般的な考えである。城の範囲については普通、内郭に限り城跡と見なすのが有力である。

現在、内・外郭線の南側三ヶ所（池の尾・堀切・深迫）に門礎が残っている。

### Ⅲ．鞠智城跡の調査

#### 1. 調査の変遷

故坂本経克氏や中島秀雄氏らの長年にわたる鞠智城跡の研究成果により、「史跡・伝鞠智城」として長者山礎石群と深迫門礎石を県史跡に指定。（昭和34年12月）

#### 第1・2次調査（昭和42年度）・第3次調査（昭和43年度）

米原台地の水田化工事（農業構造改善事業）及び長者山の山林開墾に伴う緊急調査。三島格氏によれば、この時、故荒木精之氏（日本談義社）の側面的な協力があったという。熊本県教育委員会は名称を「鞠智城」と改称（昭和43年）。

#### 第4次調査（昭和45年度）

宮野礎石の露出、長者原礎石群の全面露出。長者山の測量を行う。

〔調査主体：鞠智城調査団 調査指導：鏡山 猛 調査団長：乙益重隆〕

### 第5次調査（昭和54年度）

町道（裨方<sup>ひえかた</sup>～立德線）拡幅工事に伴う事前調査。軒丸瓦片が出土。

〔調査主体：菊鹿町教育委員会〕

### 第6・7次調査（昭和55年度）

文化庁国庫補助事業。第6次では上原地区の発掘。第7次では宮野礎石群の全面露出（昭和56年11月11日付けで県史跡に追加指定）。調査結果は『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告第59集にまとめられている。

### 第8・9次調査（昭和61・62年度）

文化庁国庫補助事業。第8次では航空撮影による米原地区の地形図作成作業。第9次では長者山礎石群調査。多量の炭化米と瓦が出土。

### 第10・11次調査（昭和63年度・平成元年度）

文化庁国庫補助事業。宮野礎石群周辺及び少監どん地域の調査。

### 第12次調査（平成2年度）

文化庁国庫補助事業に加えて、県の自主事業による重要遺跡確認調査としての鞠智城調査を予定。

〔調査主体：熊本県教育委員会〕

## 2. 近年の調査の成果

### 昭和62年度（第9次調査結果）

調査地区は米原地区の墓所となっている長者山で、米原長者御金蔵跡と伝えられている所である。各所に点在する礎石群を中心に計4箇所約20cmの表土を剥ぎ、抜かれた礎石の掘り込み穴、および根石等の確認を行った。

〔1〕長者山の墓所地区には少なくとも6棟の建物が存在した事が判明し、2棟についてはプランが確認できた。今日、長者山の南側は削平されて畜舎となっているが、この箇所を含めると長者山全体では当時10棟前後の建物が存在した事が考えられる。

〔2〕建物跡のほとんどから炭化米と炭化木材が出土する事から、これらの家屋が<sup>もみ</sup>糊

を備蓄した倉庫であったと考えられる。炭化木材から推察するに、柱は手斧<sup>ちやうな</sup>などによる加工が施されていない丸柱であったと思われる。

〔3〕プランの確認された2棟の内、1棟分については炭化木材の出土も少なく、3間×3間のほぼ正方形のプランである所から、<sup>もみ</sup>粉倉庫とは考えにくい。

近くに「堂の下」の小字名が残る事も併せて、建物は寺院であった可能性が高い。但し、現段階では古代山城に伴う寺院か中世寺院であるかは不明である。

〔4〕『三代実録』の貞観17年(875)6月の項にカラスの群れが菊池郡倉舎の葺草<sup>かきくさ</sup>をかみ抜いたとあるので、ほとんどの建物が茅葺<sup>かやふ</sup>きであった事は明らかである。しかし、瓦片も出土するので、屋根の一部に瓦が使用された事も確かである。特に、長者山出土の瓦は平瓦に限られ、焼けていることから、火災に遇っている事が判る。

〔5〕炭化米は拳状の塊となって出土する事や、炭化した麻縄も出土している事などから、カマス状か俵状のものに詰められて保管されていた事が推定される。また<sup>のぎ</sup>粉が残り、<sup>のぎ</sup>粉米のまま備蓄されていた事も把握できた。芒<sup>のぎ</sup>のついてるのが2～3粒ある。検出した建物の内、1棟からは炭化米が一斗<sup>と</sup>ほど、出土した。

〔6〕今回の調査では長者原と同様の状況で、長者山からも火災に遇った倉庫跡が確認された。両者の間には相当の距離があるところから、類焼の可能性はなく、同時期の放火を考えた方が妥当ではないかと思われる。

一部で考えられてきた「神火説」「役人の汚職の証拠<sup>いんめつ</sup>湮滅のための放火説」もあながち否定されるべきものではない。 (第8・9次調査主任 桑原憲彰)

#### 昭和63年度(第10次調査結果)

宮野礎石群の北西側にある上下2段の畑地を調査し、下段から建築址1棟を検出した。さらに米原集落近くの水田地(少監どん地区)を調査し、建築址1棟を検出した。

#### 〔1〕宮野礎石群の北西側調査区

礎石(推定3間×4間)に掘立柱<sup>ひさし</sup>の庇が付く建築址を1棟検出(5号建築址)。



庇の柱間間隔は梁行 2.3m (7.7尺)、桁行 2.2m (7.3尺) で、庇列は 5 間 (11.5m) × 6 間 (13.2m) を測る。角隅の柱穴は直径約40cm、掘形の大きさは1.3～1.5mで、深さは1.2mを測る。なお、礎石列は移動した状態で検出された。

鳥図が線刻された不明銅製品 ( → P.27 ) が出土。

建物の性格として、明らかに倉庫ではない。(岡田茂弘氏の示唆)

[ 2 ] <sup>しょうげん</sup>少監どん調査区 (正確には「少監どん」と称される水田の西隣りにある。)

1 間 × 5 間の掘立柱建築址を検出。建物は梁行 6 m (20尺)、桁行15m (50尺) の大きさで、桁行の柱間は 3 m (10尺) を測る。梁行・桁行とも未発掘地域へ拡大する可能性がある。掘形の大きさは1.3～1.5mで、深さ0.5mを測る。

調査区は昭和43年の開田により、遺構の上面はかなり削られた状態にあった。

建物の性格は不明。同時に青磁を伴う鎌倉～室町時代の柱穴を確認。

#### 平成元年度 (第11次調査結果)

宮野礎石群の南東側を調査。3 棟の掘立柱建築址と 2 棟の礎石建築址、及び築城前の竪穴式住居址・掘立柱建築址等を検出。

#### [ 1 ] 掘立柱建築址

1号建築址 3 間 × 4 間の総柱の建物である。梁行4.5m (15尺)、桁行 6 m (20尺) の大きさで、柱間は梁行が1.5m (5尺)、桁行が 2 m (6.7尺) を測る。

掘形は0.7mで、平面のプランには円形状や楕円形状のものがあり、多少のばらつきが見られる。柱穴は直径30cmを測る。

2号建築址 1 間 × 3 間の建物である。梁行2.4m (8尺)、桁行4.2m (14尺) で、桁行の柱間は1.4m (5尺) を測る。

掘形の大きさは1号建築址とほぼ同じで、柱筋も通る。1号・2号建築址ともに同時期の倉庫と思われ、今回検出された建築址の中では、最も古い時代に属すると考えられる。(奈良国立文化財研究所集落研究室長 工楽善通氏の示唆)

3号建築址 梁行6m(20尺)、桁行9m(30尺)の建築址で、柱間は梁行・桁行ともに3m(10尺)を測る。掘形は1.2~1.4mで、柱穴の直径も40cmとかなり大型である。

建物の性格として、倉庫とは考えにくい。(甲元眞之氏の示唆)

角隅の掘立柱穴から7世紀後半の須恵器が出土し、内、一つについては、柱の建て方に根巻き工法(→P.27)がとられている事が判明した。(岡田茂弘氏の示唆)

## 〔2〕礎石建築址

2棟分の礎石建築址については、礎石そのものは移動しており、下部遺構の地業が検出された。これについては、平成2年度に詳細な調査を行う予定である。

4号建築址 掘り込み地業がなされており、ローム層土を使用した化粧土も検出された。地業の範囲は6.3m(21尺)×9m(30尺)で、平面プランは長方形を呈する。桁行は3号建築址と同一方位にある。

3号建築址は一部、4号建築址を切っており、3号建築址よりも明らかに古い時代のものである。移動した礎石は赤変しており、建物が火災にあった事を伝えている。なお、礎石上面には、はっきりとした柱跡が残っている(礎石と柱の接触面は熱の影響を受けず、赤変してない)。これにより、柱の直径は40cmと推定できる。

## 〔3〕その他の遺構

築城前の竪穴式住居址(6世紀代)と小型の掘立柱建築址(梁行・桁行ともに3.4m)が検出されている。その他、築城時に縄文時代の包含層(後期が主で、一部に早期もある。)を壊していることがわかった。

## 〔4〕小 結

- ① 平成元年度の発掘調査によって鞠智城跡の建築址は、掘立→礎石→掘立と変遷しており、大野城跡と同一の変化をとげていた事がわかった。
- ② 宮野礎石群周辺地の礎石建築址については古代寺院跡のそれと同様な掘り込み地

業がなされている事がわかった。これについては岡田茂弘氏の「掘り込み地業や礎石など、当時の最高の技術が使われていることから、単なる修理ではなく、城の持つ性格がこの段階で変わった。つまり国防意識の高まりに伴い本格的に改築されたと見る」との示唆がある。

- ③ 建物の性格については、3号・5号建築址が注目される。3号の掘形に見られる根巻き工法をはじめ、造りと規模からしても到底、倉庫とは考えにくい。
- ④ 出土遺物では、布目瓦の出土が極めて少なく、検出された建築址の屋根は大方が茅葺きであった事がわかる。なお3号建築址の掘立柱穴の掘形からは、例外的に数片の瓦片がまとまって出土している。

#### IV. 今後の調査の課題

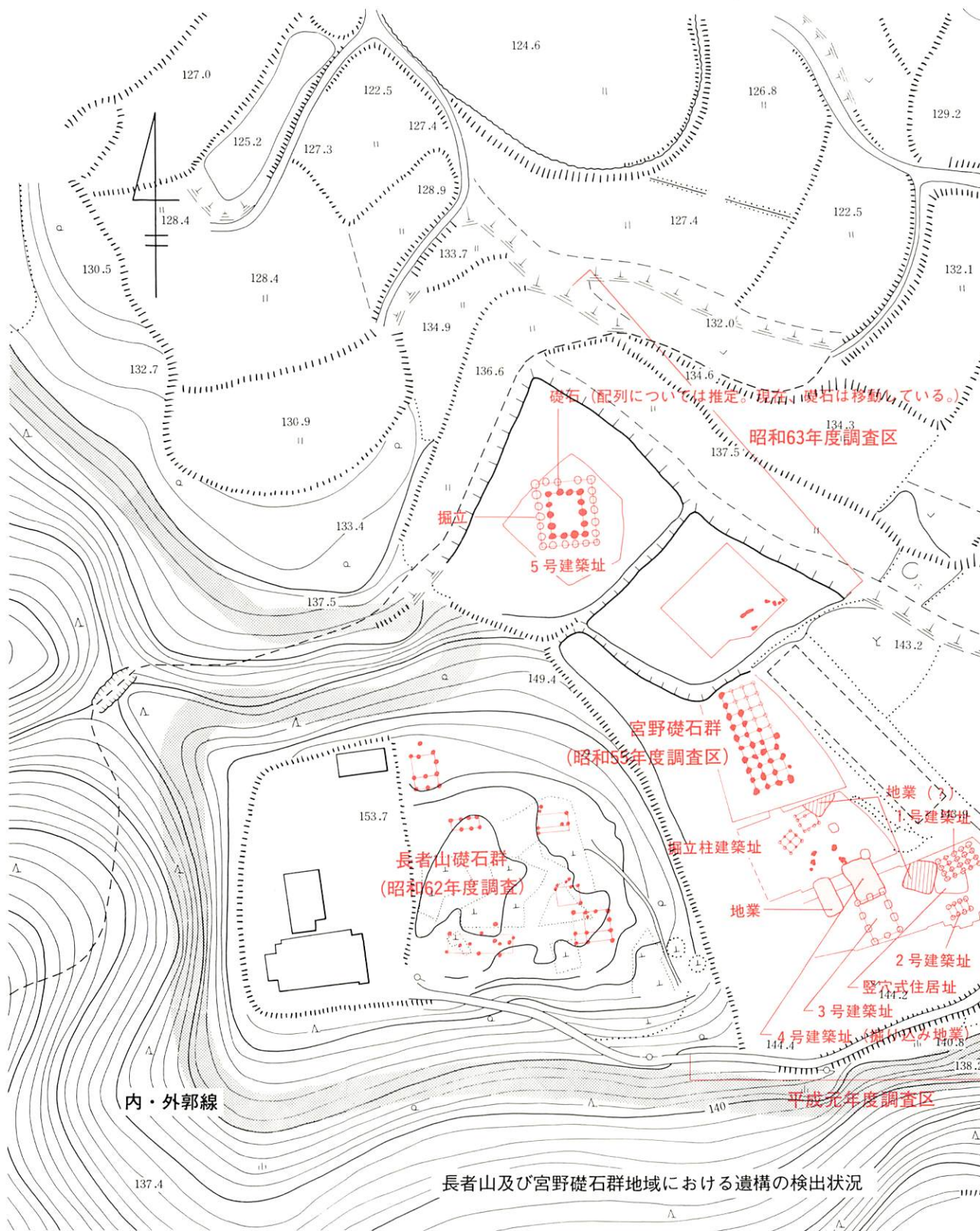
- 1. 文献に明らかでない鞠智城の造営時代を考古学的に解明する。
- 2. 城門礎石の所在地をもとに土塁線を追求する事により、城域を確定する。

なお、一部については、土塁線の代わりに柵の可能性もある事が岡田茂弘氏より指摘されている（現場での調査指導）。

- 3. 『続日本紀』の大宝元年（701年）2月10日の条に「<sup>はぐのこ</sup>唱更国司の奏により国内の要害に柵を建て、戌をおき、守る事を許す」とある他、同じく天平神護元年（766年）2月6日の条に「日向、大隅、薩摩三国に大風被害あったため、柵戸の調庸の徴収をやめる」とある。

これは鹿児島県国分市小川に所在する<sup>はぐのこ</sup>隼人の城（古代城としての伝説がある）の存在と相まって興味ある記述である。鞠智城の造営時期を考える時、このような文献史料との比較検討が必要と思われる。（岡田茂弘氏の示唆）

- 4. 熊本県を代表する文化遺産として、鞠智城の保存及び活用を図るため、将来に向けた調査計画をたてる必要がある。（文化課長 江崎 正）



長者山及び宮野礎石群地域における遺構の検出状況





少監どん地区における遺構の検出状況  
(昭和63年度調査)

## V. 鞠智城跡に関する諸説

(記載は五十音順による)

——今後の鞠智城調査の基本方針を示すと思われる指摘事項——

李 熙進 <sup>イイジン</sup> [ 明治大学講師 ]

- ① 大和防衛のためなら何故に大宰府から60km南の遠距離地に築造したのか。さらに何故に菊池川の河口から東へ20kmの遠地に築造したのか。
- ② 大野城に匹敵する大規模造りで、典型的な逃げ込み城である。

『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13

岡田茂弘 [ 千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館 考古学研究部長 ]

丘陵に建てられた鞠智城は東日本の城を思わせる。鞠智城で政庁跡などが見つければ、新羅などの侵攻に備えて造られた大野城や基肄城とは異なり、南九州へ備えて建てられた可能性も出てくる。

熊本日日新聞 (平成2年4月24日掲載)

小田富士雄 [ 福岡大学文学部教授 ]

鞠智城は大野城や基肄城のように土塁が明確でないので、城域を明らかにするところまで至っていない。今後、調査すべきところの多い城跡である。

『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13

乙益重隆 [ 国学院大学名誉教授 ]

- ① 鞠智城の草創はいつ頃になるか明らかでないが、大野城と基肄城と同時か、それより幾許も隔たらぬ頃の築城と見るべきであろう。
- ② 鞠智城の築城方法や施設については、大野城や基肄城など極めて共通する点(馬蹄形の自然地形を利用)もあるが、一面、著しく異なる点(内郭と外郭の二重の配置説がある)も少なくない。
- ③ 大宰府の都から隔絶し、海岸からも奥まった地に何故、壮大な施設を必要とした

のであろうか。現地は古代交通上から見て、それ程の要衝とも思えない。

④ 築営の主目的が外敵対策にあったことは、国史からも明らかである。西方の有明海・八代海方面から侵入する外敵対策が考慮されたのであろう。

⑤ 大宝2年(702年)以来、叛乱を繰り返した南九州の隼人対策も考慮されたのではないか。 『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10

鏡山 猛(故人・1984年没)〔元・九州大学文学部教授〕

① 所在地は前線基地(対馬の金田城)に対する後背地(鞠智城は唯一、内陸部に造営されている)にあたり、一方で、城跡の南は肥後平野に通ずる要路地である。

② 奈良時代の郡衙ぐんがには数十棟の倉庫があって管内の米穀を収め、動倉・不動倉に分かれていた。山城内の倉庫も同様であった事は『三代実録』天安2年の鞠智城の記事によっても伺われる。 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13

桑原憲彰 〔熊本県文化課 第8～9次鞠智城跡調査主査〕

立地条件からすれば、むしろ海外防衛のためとするより当時、再三、大和朝廷に反抗していた隼人族などの「まつろわぬ者ども」へ備えての築城ではなかったか。南面して設けられた3つの城門の方向に注目すべきであろう。

『瓦版』山鹿文化財を守る会

甲元眞之 〔熊本大学文学部助教授〕

鞠智城の築造は、菊池川流域に分布が集中する装飾古墳の存在と関係があるかも知れない。装飾古墳は朝鮮半島と密接なつながりをもつ文化遺産であるため、大和朝廷は菊池川流域を朝鮮半島に直結した地域とみて、ここに鞠智城という楔を打ち込んだ可能性がある。この際、大和朝廷は菊池川流域と朝鮮半島は近距離にあると誤認したのではあるまいか。 調査者への示唆

齊藤 忠 [大正大学名誉教授]

朝鮮式山城で、設置年代の明らかでないものがある。鞠智城や常城<sup>つねじょう</sup>（広島県芦品郡新市町）などがそれである。これらは発掘調査の成果を俟って、改めて考証されなければならない。 『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13

島津義昭 [熊本県文化課 第6～7次鞠智城跡調査主査]

- ① 鞠智城は低い台地部に占地する事や、城域に谷を包む事など、他の山城と異なる点が多い。しかも、水門などの軍事的拠点になるような堅固な防備施設を有していない。この事は大野城のような山城とは異なる性格を有していたからと思われる。
- ② 鞠智城の築城年代の問題については、出土した軒丸瓦の年代からみて、大野城や基肄城の年代と同時期である。
- ③ 城内の建物に関しては、炭化米を出土する建物が「不動倉」で、宮野礎石のような大規模な建物は「兵庫」であろう。

「鞠智城についての一考察」太宰府古文化論叢上巻

成 周鐸<sup>スエック</sup> [忠南大学校文科大学教授]

- ① 鞠智城が百済系の城跡である事は疑いない。
- ② その中でも、大野城のような百済系の山城ではなく、丘陵上に築城する都城型に似た城跡と思われる。（都城は政治・経済・文化の中心地となる所で、平地丘陵、または南向きの条件に合わなければ成立しない。さらに、防衛・交通・用水のため不可欠の条件である川や海をかかえていなければならない。）
- ③ 百済の場合、平地の都城から山城にかけて発展していくのが例とされている。地域的に鞠智城と大野城を結びつける事は出来ないが、平地から山城に発展していく百済の例から、鞠智城は大野城・基肄城よりも先立って築城されたのではあるまいか。

『肥後考古』第6号



高橋誠一　〔滋賀大学教育学部教授〕

- ① 主要交通路を含めた菊池平野の大半や、遠方に国見山などの諸峰を臨み得る点でも、他の古代山城と同様である。
- ② 山鹿・菊池両郡家と距離的に近接している。「長者原」という地名を残し、肥後国府と遠く離れている事などから、山城築造の背後に国府とは違った在地豪族勢力が想定される。
- ③ 肥後四軍団のうち、一軍団が菊池郡に駐したとすれば、小条里区が展開して肥後屈指の穀倉たる菊池平野と豪族・軍団が、城を一接点として結びついていたとも考えられる。
- ④ 近くに「火の岡山」があり、鞠智城も<sup>のろし</sup>烽の機能を兼備した可能性が強い。
- ⑤ 他の古代山城との関連は見出し得ず、対半島の為の軍事施設としては、余りに南に偏している。　　『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13

田辺哲夫　〔熊本大学講師〕

- ① 大陸対策であるならば、菊池川河口にある玉名方面に築城すべきであるのに（重要な港があり、大陸からの急襲に対して警戒圏に入る）、およそ遠距離の菊池川の内陸部に築造されたのは、大宰府の熊襲<sup>くまそ</sup>対策によるものであろう。（日本武尊<sup>やまとたける</sup>の征討伝説で知られる熊襲族は、元来、菊池を<sup>こち</sup>故地<sup>こち</sup>にしていたと考えられる。活発な活動が伝えられる球磨地方や鹿児島方面への進出は、その後の事であろう。）
- ② それでは、何故、熊襲が活動した球磨や鹿児島に築城されなかったのかという疑問に対しては、熊襲の勢力によって安全対策のため、菊池まで後退せざるを得なかったのであろうとの推論が成立する。大宰府は熊襲故地の菊池に城を築くのが精一杯だったと見る。
- ③ 今後、城の中心部である政庁の調査を行う必要があり、城域からして、調査はかなり広域に行う必要がある。城門礎を含めた周辺一帯の本格的な調査をすべきである。

- ④ 大宰府から派遣された役人が、後に土着して菊池氏と名乗ったのではないか。

調査者への示唆

富田紘一 [熊本市立博物館学芸員]

大和朝廷が、第二の磐井の叛乱に備えて火君<sup>ひのきみ</sup>（中九州の雄族）を牽制する意味で、肥後北部の穀倉地帯の中央に鞠智城を築いた可能性がある。 『日本城郭大系』

原口長之 [熊本県文化財保護審議員]

- ① 兵屯基地である事に疑いないが、地理的位置から対大陸向けとは考えにくい。むしろ南方に向けた熊襲対策のための造城と考えた方が妥当ではないか。
- ② 役人クラスの居住区域をつきとめて調査する必要がある。
- ③ 長者山及び宮野礎石群地域における倉庫群の全体配置を把握する必要があるだろう。

調査者への示唆

日野尚志 [佐賀大学文学部教授]

- ① 朝鮮式山城を考えるにあたっては、軍団との関係を重要視すべきであろう。鞠智城の場合は菊池団が考えられる。
- ② 菊池城が、何故、菊池川の上流域に築城されたのか明確でない。どう見ても直接大陸を意識して築城されたとは言い難い。別の見方をすれば、河口よりも上流域が重要視されたことになる。必然的に上流域が大宰府から肥後国府を経て、南へ至る駅路に沿うルート上にあることに注目しなければならない。やはり、鞠智城は隼人を意識した築城と判断される。 『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告

松本雅明 [熊本大学名誉教授]

- ① 鞠智城は大宰府の外城としてとらえられよう。
- ② 『続日本紀』に698年の修繕が見える事から、それよりかなり以前に造成されたものであろう。
- ③ 『三代実録』の貞観17年（875年）6月の記事より、建物のほとんどすべて草葺

きであった事がわかる。

- ④ はじめ城であったのが、後に郡家や郡倉にかわったとも考えられる。
- ⑤ 城跡の一区画から、平安朝後期の瓦が出土する事から、その頃になると、さらに寺院に変化した可能性もある。
- ⑥ 門の跡は東南に2ヶ所、西南に1ヶ所ある。西南の谷に水門の跡らしいもの、頭合には木野川の支流を堰き止めた跡らしいものがあるが、疑問がある。
- ⑦ 米原集落のあたりに兵舎、西南方の台地に倉庫、長者山からその下の畑に役所があったと考えたい。

【熊本の歴史】【熊本県の歴史】

三島 格 〔肥後考古学会会長〕

鞠智城の調査は土塁の追求にかかっている。鞠智城には元来、石塁は無かったのではないか。馬こかしの石垣と称されるものは、後世の築造物ではないか。

調査者への示唆

矢加部和幸 〔熊本日日新聞社地方都市圏部次長〕

鞠智城は当初、隼人対策のために築城された大和朝廷の前線基地ではなかったのか。(正史に登場する数少ない貴重な遺跡であるので今後の調査に期待したい。)

平成2年度から県が取り込む事になった重要遺跡確認調査(鞠智城跡調査)の英断を評価する。

調査者への示唆

#### 【参考文献】

- 【北九州瀬戸内の古代山城】日本城郭史研究叢書10 小田富士雄編 名著出版 1985
- 【西日本古代山城の研究】日本城郭史研究叢書13 小田富士雄編 名著出版 1985
- 【鞠智城跡】熊本県文化財調査報告 第59集 熊本県教育委員会 1983
- 【鞠智城についての一考察】太宰府古文化論叢 島津義昭 1983
- 【日本城郭大系】第18巻 新人物往来社 1979
- 【瓦版】山鹿文化財を守る会 〔熊本の歴史1〕熊本日日新聞社 1958
- 【肥後考古】第6号 肥後考古学会 1987 〔熊本の歴史〕文画堂 1957

## 付 録

『日本古代遺跡の研究』吉川弘文館 1971

齊 藤 忠

### 菊池城

『文徳天皇紀』に、二年五月令大宰府繕治大野、基肆、鞠智三城。『文徳実録十卷』に、天安二年閏二月丙辰肥後国言菊池郡城院兵庫鼓自鳴。『三代実録三十五卷』に、元慶三年三月十六日肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴などあり。此城も王制衰へたる比に廃れしなるべし。『長瀬氏云』。菊池郡木野村内に今も城院兵庫の趾あり。「なほ次なる城野郷にもいさゝかいふべし」

### 城野郷

『和名鈔』に菊池郡城野郷あり。城野は支奴とも支乃ともよむべし。名義は古に城を造りしに困れり。「初て造れるはいつの比にや伝へなけれど、其城を繕治せしめ給へる事は『文徳天皇紀』に見えて上に引るが如し。」(後略)

(太宰管内志 肥後之二 菊池郡)

### 菊池城院

一 文徳実録に云。天安元年閏二月丙辰肥後国より言す。菊池城院兵庫鼓自鳴。同五月又鳴と云云。

或人の曰。妙蓮寺よりもり山迄之間馬場筋を院の馬場と云云。此名によりて考れば守山の上にて平なる所有り。此辺にてはなき歟。分明ならず。城院の馬場と唱来れば、疑なき事也。上略下略の例は総て多き事也。又菊池氏全盛の比犬追物を執行れし事有りと云。此に依て考れば犬馬場と書べし。当世は犬の馬場と書人多しと云云。余おもふに院馬場正説たるべし。今の正観寺村昔は馬場村と云。然れば院の馬場に依て村を馬場と名付、正観寺出来て後に村名易る。是馬場村は菊池以前よりの村名にして犬追物菊池家に初る時は、院の馬場の馬場を略して村に名付たる事必定也。

形勝の地は、古今共に人見立る事同じきもの也。佐々成政の城跡加藤氏の今の御城を築き給ふも大方は同所なり。文徳帝の比此地形勝に依て城院を立給ひ、菊池氏茂又此小城を築く。古今の人見る所同じき事類多し。且犬追物を行はれしは定てさる事なるべし。然共夫に因て村名などに名付る事甚おほつかなし。昔は犬追物諸侯の国所々に有し事にて村并に道に名付る事うたがはし。犬追物の濫觴は源頼光將軍市原野にて、野飼の牛の多きに腹さきたる牛の中に奇童丸隠れ居たり。人々是をしらず。皆生たる牛を射けるに渡辺綱斗はいかゞおもひけん。死せる牛を射けるに奇童丸其中より出たり。是牛追物の初となむ。其後、牛は用物なればとて犬にか



へたりとかや。鎌倉の時、寿永元年金沢にて牛追物有り。同年六月由井の浦にて又有ける。犬追物は貞応元年二月入道將軍頼經の代に南庭にて初て有けるとぞ。其後牛追物は絶て唯犬追物斗世に行はれし故実と成ると承る。貞応元年より寛政六年迄に五百七拾三年になる。

#### もり山

一 正観寺村内院馬場奥に有り。往昔菊池城院を守る人此所に居たる共にて名付たるにはあらずや。能因法師の歌枕に出る肥後国名所守山は此所に有りといふ。猶尋ぬへし。武政公築き給ふ城之此所に有故守山の城とも云。

菊の池「文政八乙酉表識の石を立文字菊之池とあり。大槻彈藏の筆（是れも後人の書入也）」  
(後略)

一 深川村観音堂の道越南道下竹林の内に有り。菊の城の跡よりは未の方に当る。昔は池形菊花の形に似たりとぞ。「山本郡菱形の池の類なるべし。」是は菊池にて名高き所なれば、古は清水湛々溢流みたりと聞ゆ。 (中略)

菊の池は其中に在りしと云。和名鈔に菊池を久久知と訓ず。

#### 不動倉

一 米原村内に在り。文徳実録曰天安元年菊池郡不動倉十一宇火ありと。不動倉は米穀を蓄置窮年の資とす。常には出さざる故に不動倉と号する事延喜式に見ゆ。不動倉の跡今に至る迄地を穿に焼米出る事夥し。又禹余糧を出す。俗に米原長者の冏子と呼ぶ物也。焼米も又長者の事に云人あれ共おほつかなし。井沢長秀曰酉陽雖組に乾陀国に昔尸毗王の倉庫有しが火に焼る。其中粳米焦る物今尚存すとあれば、今の焼米出るは不動倉の跡なるべしと云云。天安元年より寛政六年迄に九百四拾年に成る。

(菊池風土記 卷一)

注：『太宰管内志』『菊池風土記』の史料により江戸時代後期における鞠智城の考え方がわかる。(大田)



米原地区航空写真〔平成元年撮影〕





3号建築址（人物は掘穴に立つ）と掘り込み地業（左辺の中央部）〔平成元年度調査〕





1号建築址〔平成元年度調査〕



2号建築址〔平成元年度調査〕





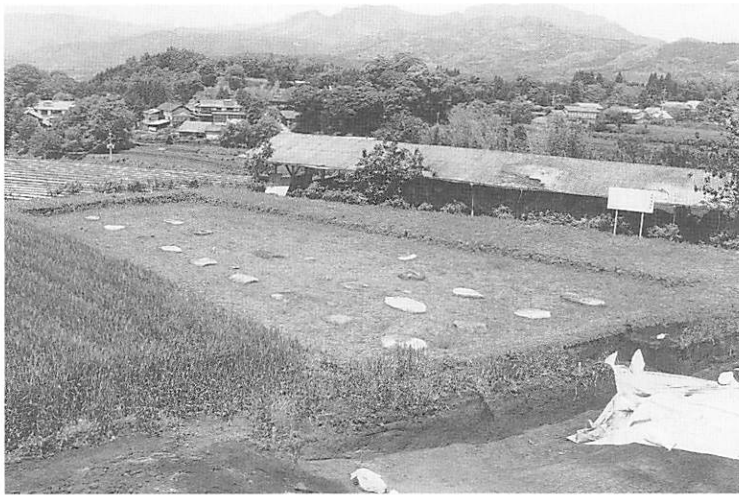
少監どん地区より検出の建築址〔昭和63年度調査〕



5号建築址〔昭和63年度調査〕



深迫門礎石  
〔昭和42年度調査〕

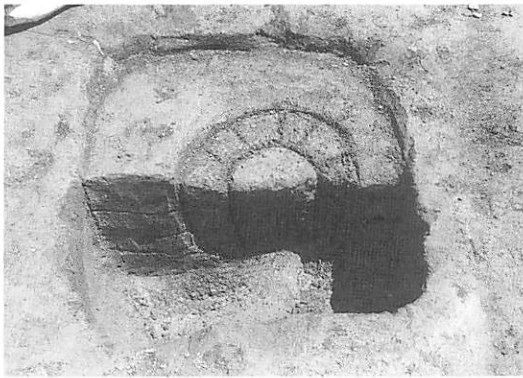


宮野礎石群  
〔昭和55年度調査〕



長者山礎石群  
〔昭和62年度調査〕





### 〔根巻き工法〕

柱を掘形に建て込んだ後、柱を固定するため、柱の周囲に角材を楔状に打ち込む工法である。普通は塔の心礎などに用いられる工法で、塔以外の建築址から検出された事は極めてめずらしい。



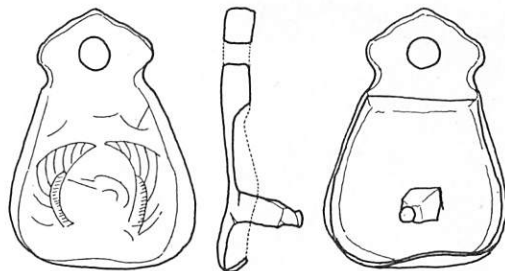
### 〔炭化米〕

台地中央部の長者原は、古くより炭化米の出土地として知られている。写真に掲げた炭化米は、昭和62年度に調査を行った長者山の礎石列間の床から出土したものである。



### 〔長者山出土の瓦〕

長者山の平坦地北縁より出土した布目瓦で、鞠智城跡調査では例外的にまとまって出土している。これにより、長者山礎石群の建物の一部に瓦が使用されていたことが明らかとなった。（写真撮影：桑原）



(実測・松舟)

0 5 cm

### 〔不明銅製品〕

昭和63年度の調査で検出された建築址（礎石に掘立柱の庇が付く）の一部から出土したものである。表面に孔雀、又は鶴と思われる鳥図が線刻されており、カットされた側面には、濃緑色の皮膜痕を認める。青銅製で、全長5.7cm、上位に直径6cmの孔が穿っており、裏面の下位に留め金具が付いている。重さ50.11gで、中途にねじれがある。

— 概報作成 —

責任者：江崎 正（文化課長）  
総 活：隈 昭志（教育審議員）  
          桑原憲彰（文化財調査第2係長）  
担 当：大田幸博 西住欣一郎（文化財保護主  
          事） 松舟博満（囑託）  
          石工みゆき 溝口真由美 宮崎敬子  
事務局：上村忠道（経理係長）  
          大広美枝子 川上勝美（主任主事）  
協力機関：菊鹿町教育委員会  
写真提供：大揮環境施設計画事務所  
          （表紙及び本文中の鞠智城全景写真）  
写真撮影：横山高明〔熊本光画会員〕  
          （昭和63年度・平成元年度調査分）  
\*表紙題字は吉里哲也菊鹿町教育長による。

熊本県文化財調査概報

## 鞠 智 城 跡

平成2年6月1日

編集発行：熊 本 県 教 育 委 員 会

〒860 熊本市水前寺6丁目18-1

TEL (096)383-1111 (代)

文化財調査第2係(内)6716

印 刷：株式会社 大和印刷所

熊本市戸島町920-11

TEL (096)380-0303

02 教委 教文

④ 001



この電子書籍は、平成2年度熊本県文化財調査概報を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県文化財調査概報：鞠智城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<https://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2024年9月5日